

## 大好きな祖父と祖母

小 六

となりの町に住む私の祖母は、私が保育園のときに、心臓の動きが悪くなり、ペースメーカーを胸に入れる手術を受けました。それまでは、とても元気で、私と買い物に行ったり、旅行に行ったりしていたのに、その機器がないと心臓が止まってしまふと聞いて、とてもショックでした。

私はその当時、病院へよくお見まいに行きました。祖母はとても喜んでくれたけれど、入院している人の中には体中にチューブがついてねたきりの人や、認知しように大きな声を出している人がいて、小さかった私は、こわくて苦手でした。

その私が変わったのは、祖父が三年前に肺ガンで亡くなったからです。病状が進むにつれて、歩けなくなり、自分のことができなくなりました。祖父はいつも、「こんな体になって、情けない。」と言っていました。私はそれからお見まいに行くたびに、祖父のお手伝いをすることにしました。

「起こしてくれる？」

とたのまれれば、ひよいっとベッドの上に乗って、両手を思い切り引っぱって起こしたり、布団をかけてと言われれば、

「このくらいでいい？」

と聞きながら、かけたりしました。飲み物をわたしたり、歯ブラシを取ったりなど、私ができることは、お手伝いをしました。祖父は、

「おじいちゃん専門の看護師さんだね。」

「ありがとうね。」

「いつも喜んでくれました。私も祖父のお手伝いできて、とてもうれしかったです。入院していた人も、きつと祖父と同じ気持ちで、自分で自分のことができなくなり、くやしかったんだろうなと思いました。」

祖父が亡くなった後、心臓の悪い祖母が、去年の四月に腰を骨折しました。今、少しは歩けますが、車いす生活をしています。やはり、誰かの助けを借りないと、生活できません。母は一日おきくらいに祖母の家に行き、私は毎週土曜日に、家族と夕食を食べに行きます。そして、トイレについて行ったり、薬をまちがえないようにお薬カレンダーに入れたり、戸じまりを見たり、ときどき草むしりを手伝ったりしています。

祖母は、私と話すのが大好きで、私は学

校の話をたくさんします。すると、

「あなたが来るだけで、おばあちゃんは元気になるよ。ありがとうね。」

と言ってくれます。ありがとうというのは私の方です。私が赤ちゃんのころは祖母がベビーカーをおして散歩したり、いろいろな所に連れて行ってくれたりしました。今度は、私が祖母の車いすをおして、散歩に行ったり、買い物に行ったりする番です。

老人ホームに勤めている父は、

「誰でも年をとるのだから、お年寄りが困っているときは、助けなければ、自分のときには助けてもらえないよ。いいことをすると、きつと自分に返ってくる。」

とよく言います。

私は六年生になって、総合的な学習の時間に高れい者疑似体験をしました。足におもりをつけたり、ゴーグルをしたりしたの

で、特に階段を上るときや立つときは足が直角にしか動かせなくてとても大変でした。祖母はいつもこんなに大変な思いをして暮らしていると知って助けたい気持ちになりました。

祖母には、いつまでも元気でいてほしいので、私ができることは、お手伝いしたいと思います。そして祖母だけではなく、困っているお年寄りがいたら助けたいと思います。